

● 研究室紹介

秋田工業高等専門学校土木工学科 計画系研究室

折田 仁典

はじめに

秋田工業高等専門学校は、昭和39年に秋田市北部の丘陵地「飯島の丘」に設立された。本校近郊には、奈良朝政府が東北開発の日本海側の重要拠点として築いた秋田城の遺跡、江戸時代秋田藩の城下町久保田の外港としての役割を担って栄えた土崎港などがあり、歴史的な趣きを感じられる。また、本校から眺望できる雪を頂く太平山(1171m)の山並は絶景で、さらに学校の周囲は閑静な住宅街で形成されており、静穏で、勉学、研究の地としては最適な環境にある。

設立時の開設学科は、機械工学科、電気工学科、工業化学科の3学科であったが、昭和44年、4番目の学科として土木工学科が増設され、現在に至っている。学生総数は約800名、教官は一般科目も含めて62名、土木工学科は10名である。

土木工学科における計画学の現況と計画系研究室

高専においては、大学にみられるような講座制はなくそのため、計画学講座、計画学研究室などと称する正式な名称はない。したがって、教官は各個人の研究室をベースに研究活動を行う形式がとられている。重複する専門分野の教官がいる場合は、個人レベルで相談し、互いに連携しながら、講義、卒業研究を担当している例もある。

計画学関係の科目が本格的にカリキュラムに取り入れられたのは、昭和52年である。現在は5学年次において計画学Ⅰ(土木計画学)、計画学Ⅱ(地域および都市計画)、交通工学の3科目がそれぞれ1単位(週1時間)で組んであるが、いずれも選択科目であり、必修科目とはなっていない。このため、残念であるが、卒業まで計画系の科目を全然学習しない学生もいる。

卒業研究では、学生は自分の希望する各教官の研究室に所属するわけであるが、その人数は教官の希望も勘案して決定される。例年、各研究室3~4名程度である。ここで、計画関係の調査、分析を行っているのは当研究室(折田)だけなので、若干、研究室の内容について記述させて頂くことにする。

卒業研究に計画関係を選択する学生の選択動機をみる

と、就職に公務員希望が多いということではなく、テーマが他の専門と比べて身近に感じる、取っつきやすいといった単純なところにあるようで、なかには先生(折田)に親しみがもて、やさしそうだからという学生もいる。さて、研究の進め方であるが、大体、1年を前期と後期に分け、前半は情報、統計学などの復習をしながら前年度の研究内容を理解し、後半は実際に調査、分析を行うという方式をとっている。したがって、調査、分析を通して学生と解析結果等について有意義な議論が展開されるようになるのは、卒業が目前に迫った時期で、いまし時間があれば、と常に思っている。とはいうものの、当研究室は学生達の笑い声とコーヒーの臭いが立ち込めることで有名で、「秋田の過疎だばよー」、「んでねえべよ」といった地域性豊かな議論を展開しながら、身近な地域問題をテーマに、研究に取り組んでいる毎日である。

研究活動

研究は主に地域計画の分野で、特に過疎問題、過疎地域に関する調査、分析を行っており、他に年に1研究程度、都市計画に関するテーマを選んでいる。研究を進めるにあたっては、秋田大学土木工学科 清水浩志郎教授と密接に連絡をとりながら、ご指導を仰ぎ、さらに北海道大学 五十嵐研究室からも適切なアドバイスを頂いている。今日までに手掛けてきた主な研究テーマを紹介すると以下のとおりである。

- 地域計画：(1)過疎問題：①人口移動モチベーション、②交通機関選択行動、③高齢者の交通挙動、④過疎問題の構造化、(2)過疎地域：①地域構造、②産業・就業構造、③圏域設定、④過疎地域のイメージ
都市計画：①バス輸送の実態、②フリーバスシステムの評価、③住宅地選好意識

おわりに

最近、「過疎」は絶対解決しない複雑怪奇な地域問題と思いつつも、反面一生かかってこの問題に取り組もうという遠大な計画をもち始めた。研究のテーマとしては疑問点も多いかもしれないが、地域に根差し、できるだけ実務レベルと掛け離れないよう留意しながら、今後も研究を続けたいと考えている。幸いなことに、清水教授からは行政、民間、大学人で構成する研究会、県内大学教官で構成する勉強会、さらには、各種委員会等に誘って頂き、地域の生の声が吸収できるなど恵まれた条件にあるので、最大限研究に生かしたいと思っている。